

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ「発音評価のためのルーブリック作成への道」(大塚 朝美)	1
● オープンキャンパス教職説明会(富永 誠)	2
● 第12回 教職勉強会(山本 淳子)・第13回 教職勉強会(仲川 浩世)	2
● 教職課程オリエンテーション(大塚 朝美)	2
● 教職コラム1「支援学校の教員になるには」(森 均)	3
● 教職コラム2「寄り添う」とは(仲川 浩世)	3
● 授業の玉手箱「二つのコンテスト」(山本 淳子)	4
● 教育実習報告(松尾 徹)	4
● 2023年度 教員養成センター活動内容	4
● 編集後記	4

巻頭エッセイ

発音評価のためのルーブリック作成への道

大塚 朝美

教員には常に評価が付いて回る。学期末には担当する生徒や学生たちの成績算出をはじめ、普段の授業でも小テストや中間テスト、期末テストなどで常に評価が行われる。大学の教職課程の開講科目である「英語科教育法」においても「テストと評価」というテーマで毎年授業が行われる。評価方法やテスト形式にはいろいろな種類があるが、なんといっても頭を悩ませるのがパフォーマンスの評価だろう。英語科目においては、「話す力」やプレゼンテーションを評価する機会は多いが、偏りなく公平に採点するのはなかなか大変である。本学が古くから開講する Phonetics (音声学) における英語の発音の採点についても、いくつかの段階を経て、現在のルーブリック(評価指標)を使用する形にたどり着いた。

本学1年生の必修科目である Phonetics では、英語音声学の理論を学ぶと同時に CALL 教室を利用して発音練習を行っている。学期末には筆記試験が行われるが、発音するというパフォーマンスも評価に組み込まれる。25年前に私が Phonetics を担当した当時の発音評価は、次のような手順であった。LL 教室で学生がカセットテープに声を録音して回収し、まずそれらのテープは別の Phonetics 担当者に発送された。自分の担当していないクラスの学生の発音を採点し、次にクラス担当者にテープを送り、2番目にクラスの担当者が採点を行った。担当者は、第一採点者の点数を見ずにまず自ら採点を行い、採点終了後に自分の採点と第一採点者の採点を比較して、最終評価を決定する、という手順であった。2名の採点に差がある場合はその平均値を最終点とし、特に差がないことが分かった時には公平に評価できていた!とほっとしたのを覚えている。発音評価は少なからず採点者の主観が影響するため、2名の教員が採点することで少しでも客観的な評価ができるように、という工夫がなされていた。

テープ交換の採点はしばらく行われていたが、やはり2名が採点することでその分時間を要することから、次の方法に移行した。採点者全員がある一定の共通認識を持つ必要があることから、学期開始前に「評価基準すり合わせ会

議」を開くことになった。Phonetics 担当者全員が集まり、数名の学生の発音をサンプルとして聞いた後、採点をおこなった。担当者はその点数だと判断した理由をそれぞれ説明し、担当者間で不一致があった場合には、このようなケースは10段階のうち6にしましょう、といった確認を行った。多い時には7名ほどの担当者が集まり、どのようなところに気を配って採点をしているのか、話し合いを持った。

評価基準のすり合わせを始めた時期と同じころ、採点者が常に参照できる評価指標の必要性が指摘された。おおよそこれぐらいできれば何点、といった採点の仕方から、明文化されたルーブリックを参照することで、担当者が誰でもあってもある一定の基準で評価されることが期待できる。このことは、評価する側、される側の両方にとってメリットとなる。母音や子音など個々の音の発音、強勢(リズム)、イントネーション、音のつながりなど音声評価の項目について、5段階で採点する音声学専用のルーブリックを作成した。今では全クラスでこのルーブリックを使用し、採点している。

音声の回収方法も随分と進化した。LL 教室が CALL 教室へと改修され、カセットテープに録音されていた音声も、パソコン上に保存された音声ファイルとして回収できるようになった。2年前には発音評価ソフトも導入され、Phonetics の授業内にそのソフトを利用して自らの発音評価を確認している。教員が一斉に学生全員の個々の発音をチェックすることは不可能であるが、ソフトを利用して自主練習を行う一方、ソフトの判定でよい評価が出ない場合は直接教員が発音をチェックし、発音矯正のアドバイスをを行っている。

近年、ルーブリックの作成については様々な場面で話題になり、共通指標として重宝されている。Phonetics のルーブリック作成に至るまでも紆余曲折があり、その場面ごとに工夫をしながら現在に至っている。しかしながらルーブリックは作成すればそれで終わりではなく、使用していく上で見直しが必要である。より公平な評価のため、ルーブリックの活用をお勧めしたい。

オープンキャンパス教職説明会

富永 誠

6月、7月のオープンキャンパスで「教職課程」についての説明会を開催した。高校生たちに学校の教師という職業の魅力を知ってもらい、併せて本学の教職課程の学びの素晴らしさをPRするために企画したもので、初めての取り組みであった。両日とも、説明会と教職課程で学ぶ学生たちを交えての座談会を続けて行った。

説明会では、卒業生で現在教壇に立っておられる方々をお招きして「教師の魅力とは」というテーマでご講演をいただいた。6月は大阪府立高校に勤務しておられる方、そして7月はいずれも大阪の私立高校で勤務しておられる方お二人で、皆さん本当に熱い思いを語っていただいた。共通していたのは、素晴らしい先生との出会いが教職をめざすきっかけになったということ、そして本学での学びが今の自分にとって貴重な経験であったという



通していたのは、素晴らしい先生との出会いが教職をめざすきっかけになったということ、そして本学での学びが今の自分にとって貴重な経験であったという

ことであった。課題の多さ、プレゼンの機会の多さ、少人数で中身の濃い授業、その全てが今校務を行う上で本当に力になっているということや、同じ教職課程で学んだ仲間たちと互いに励まし合いながら一体感を持てたことも大きかったとのことである。三人とも現在担任を持たれ、ご自分の担当のクラスを持つ喜びと責任感を感じながら、日々校務に励んでおられる様子が伝わってきた。



卒業生の木南さん

その後の座談会では現在教職課程で学ぶ学生たち数人が参加し、卒業生の先生を囲んで和やかな雰囲気で行われた。松尾教授の巧みな司会ぶりに、学生たちもリラックスしてどんどん質問を浴びせていた。「目標となるような先生はおられますか」「授業で最も気を付けていることは何ですか」「自分から話してこない生徒にどのように接しますか」等様々な内容があったが、その一つ一つに丁寧に答えていただいた。



卒業生の西井さん

これから高校生たちにオープンキャンパス等で本学の教職課程の魅力

を強く訴えていきたいと考えている。

教職勉強会

第12回教職勉強会

山本 淳子

2023年(令和5年)7月21日(金)16:40-18:10 308教室

テーマ:教育実習報告

参加者:15人(短大2人、大学9人、教員3人、事務職員1人)

大学生3人、短大生2人による春学期中に行われた教育実習の報告と、それに対する質疑応答が行われた。それぞれ試行錯誤しつつも充実した実習であったことが伝わって



きた。実習先の先生方からのアドバイスが非常に役立ったというコメントが印象的であった。質疑応答も活発に行われ、来年度に実習を控えた学生4人にとっては大いに参考になったと思われる。

第13回教職勉強会

仲川 浩世

2023年(令和5年)12月9日(土)13:20-14:50 205教室

テーマ:教育実習報告

千葉先生(児童英語教育におけるCLIL:講義とワークショップ)

参加者:16人(大学10人、教員6人)

大学生2人による秋学期の教育実習の報告と、千葉先生のCLILの理念を用いた児童英語教育のワークショップという2部制で秋学期の教職勉強会は開催された。児童英語の実際の教材、指導法を共有していただいたことによって、将来の英語教員である、教職課程履修者は、より具体的に「教室での学び」をイメージすることが可能となったのではないかと。千葉先生の児童英語に対するご経験は、現任教員にとっても刺激となり、今後の実践をどのように工夫していくべきかという展望を示唆していた。このように、教育実習生と現役の先生方のご講演を実施することで、参加者が楽しめる教職勉強会も今後も続けていきたいと願う。



教職課程オリエンテーション

大塚 朝美

今年初めて「教職課程オリエンテーション」を6月21日(水)5時間目に開催した。参加者は大学8人、教員3人であった。昨年度までは夏季休暇の直前に夏期集中講座「教育と人間」として教職課程履修を考えている大学生を対象に3日間の講座を開いていたが、短大生も含めてより多くの学生の参加を期待して新しい形でスタートする運びとなった。当日の昼休みには事務局より教職課程履修についての説明会があり、そちらに出席した学生に5時間目も出席するよう呼びかけた。

オリエンテーションは2部構成とし、第一部は仲川浩世先生による体験授業「優秀のあなたに:大村はまの教育理念とは」、第二部は教職科目紹介として「教職科目についての概要・質疑応答」を筆者(大塚)が担当した。体験授

業では、大村はま氏の紹介、教育理念について、また、大村氏の「優秀のあなたに」の文章から読み取れること、心に残ったことばなどについて各自が考える時間を設けた。学習の場において優か劣かの2択は常に意識され、学ぶ側、教える側の両者にとってとらわれがちな概念である。これから教員をめざす学生たちにとって、「優」「劣」という概念が教育とどのようにかわり、どう向き合っていくべきかを考える良いきっかけとなっただろう。第二部では、大学の3,4年次、短期大学の2年次に履修する英語科教育法、教育実習と事前及び事後の指導、そして教職実践演習の授業について、その授業内容や科目がどのように連携しているかなどの説明を行った。

最後に、参加した学生たちが教職課程に興味を持ったきっかけや教員になろうと思った理由を一人ずつ話し、また参加した教員はそれぞれがなぜ教職に就くことになったのか、エピソードを披露した。少人数の参加ではあったが、教職課程への興味を深めるスタートとなることを願う。

教職コラム1

支援学校の教員になるには

森 均

介護等体験7日間のうち大阪府立思斉支援学校（知的障害）での2日間の体験が終わると、急に研究室が慌ただしくなる。アポなしで学生が研究室を訪れてきて、支援学校の教員になるにはどうしたらいいのか？等と矢継ぎ早に質問される。そして「楽しかった。」「やりがいを感じた。」と口々に語る。私自身、教頭としての初任校は学生が経験した学校と同じ知的障害の学校だったので、その衝撃、感動等は十分にわかる。正直、教育の原点を見る思いだった。

そして、特別支援学校教諭免許状の取得方法をいくつか説明するのであるが、本コラムでは2日間の経験ではわからないことを紹介したい。ただし、私が経験した知的障害の学校でのことであることは理解したうえでお願いしたい。

さて小学部においては、保護者の我が子の成長に対する期待は極めて大きい。近所に住む同世代の子ども達の成長の様子を見て、焦りにも近い気持ちになられるのかもしれないが、期待が大きい分、教員への要求レベルが高く、教員が苦慮する場面が度々あった。また衝動性・多動性の子どもは動きが激しく、教室から脱出しようとする男児を急に追いかけてアキレス腱を切ったり、急な動きを止めようとケガを負う教員が多数いた。

プールの季節が始まるとまたまた大変である。朝起きた時から子ども達はプールに入る気満々で登校してくる。しかし、天候、気温、プールの水温等でプールでの学習を行うかどうか基準が決まっている。基準を満たさ

なければその日はプールに入れない。教員は様々な方法で子ども達に今日はプールに入れないことを伝えるが、中には暴れる子ども達もいる。その時のために、学校には大人5人ぐらいが入れる浴室が設置されていた。つまり、プールに入れない日は、浴室でお風呂に入る練習をさせるのである。担任の先生方には素早い対応と指導が求められる場面であった。

中学部ではこんなことがあった。男子生徒A君が給食を食べる度に暴れるのである。話せない生徒で、教員達は理由がわからずオロオロするばかり。体重は80キロ近くあっただろうか。原因は虫歯であることがようやくわかったが、医師から治療には全身麻酔が必要と言われた。その生徒には脳波異常があり、麻酔によって死亡する可能性があるとも言われた保護者は治療を断念した。そこで体育科の教員が、なぜか柔道着を着て歯磨きをするシーンのビデオを作成し、毎日、給食の時間に全教室に放映したのである。後日、その生徒の自宅の近くに住む教員が私に「A君の家の前を通るたびに、家が揺れています。」と報告があった。

高等部になると、生徒たちは保護者より身体が大きくなり、さらに様々なことが起こる。

紙面の関係で詳細は省くが、知的障害のある子ども達には、小学部・中学部・高等部に関わらず、健康維持のための様々な習慣を身に付けさせることが最も重要であることを深く認識しておいていただきたいと思う。

教職コラム2

「寄り添う」とは

仲川 浩世

近年、「寄り添う」という言葉を耳にするようになった。世界のあちこちで、戦争が起こり、殺伐とした社会に変容したからか。あるいは、コロナ禍によって、高等教育を受けることが困難となった人々も存在するからか。学校に通うことに対して、不安感を抱いている子供たちに大人が「寄り添う」ことの重要さが、一層問われつつある。

悩みを抱えている学生の親身になることが、「寄り添う」であると考えてきたが、果たしてそれは、本当に正しいのか。ある程度まで、励まし、力になれば、後はひとりで考え、自分の人生を見つけ出す「自律」へと導くことが求められよう。学生が辛く、苦しい時に、心の拠り所となる場所である「学校」で共に学び、話し合い、笑い、時には悩みを共有すれば、後は旅立ちを見送ることが教員の役割である。

もし、それを「寄り添う」というのであれば、自分がやってきたことは間違っていないかと感じる。授業中の声掛けを通して、何らかの悩みがあることを知れば、授業外の面談も実施しているが、それ以外に学生の問題点を把握することは極めて難しい。教員はあくまでも学校にいる間しか「寄り添え」ないものである。後は、学

生の友人、アルバイト、家庭環境など、各自が異なるコミュニティで過ごしている。教員は、どこまで踏み込むことが許されるか、「寄り添う」とことと、学生一人一人の悩みに、必要以上に干渉することとは、全く異なる。

特に、本学のように多様性が豊かな大学であれば、学生にとって、勉強以外の悩みもつきないであろう。多文化共生の教室において、異文化理解がスムーズに運べるように「寄り添う」ことは、教員にとって不可欠である。常に学生の言動に目を配り、親身になって指導する教員でいたい。

入学当初はまだ高校の延長線上であり、幼さの残る姿であった彼女達が、大学生活を通して成長し、卒業式においては、晴れ姿を見せてくれることは、教員生活において、一番の喜びである。現在の4年生はコロナ禍のため、入学式が開催されなかった。それゆえ、2024年3月に卒業式を迎えるにあたって、コロナを乗り越えて成長した姿を見守り、真の意味で自律した女性となることを願って応援していきたい。このように、大阪女学院へ入学後、学生が自律できるようにサポートすることが、我々教員の取り組むべき役割ではないか。

授業の玉手箱

「二つのコンテスト」

山本 淳子

本学では毎年、春学期に2年生以上を対象とした「プレゼンテーションコンテスト」、秋学期には1年生を対象とした「ダイアログコンテスト」が行われている。プレゼンテーションコンテストでは、2人から4人のグループが各自テーマを決めて主にスライドを使いながら英語による主張を繰り広げる。一方ダイアログコンテストでは、テーマは「人権」と決まっており、「ダイアログ」という言葉通り2人から4人の英語による会話で訴えたいことを表現する。

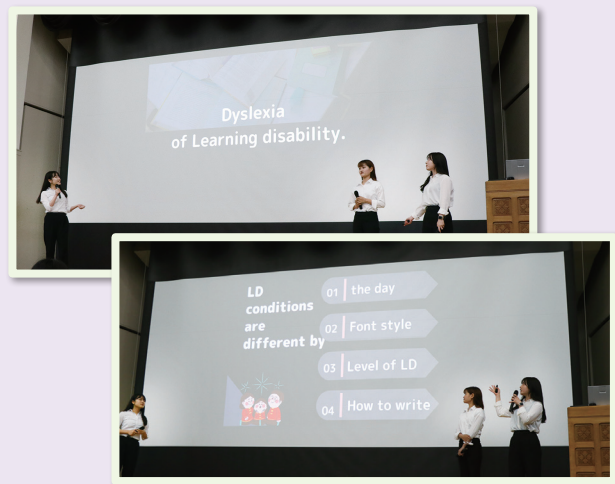
どちらのコンテストにおいても、自分たちの主張をいかに効果的に聴衆に伝えられたかどうかを競い合う。出場者の募集から本番までは1か月ほどで準備期間は長いとは言えない。その中で、大学で学んだ内容を生かして英語の台本を作成したり、スライドや小道具を準備し、授業の合間に練習し本番に挑むことになる。両方に共通することはどちらもチームワークがかなり重要なウエイトを占めるということである。メンバーが力を合わせてチームのために貢献し合うため、互いの絆も深まり大学生活の貴重な経験となることは間違いない。

2年前のプレゼンコンテストでは教職課程を履修する短大生の有志4人が出場した。情熱を持って真剣に教育にあたる教員が日本の教育を支えているということを示す劇とダンスなどで表現していた。教職学生は履修科目が多く、空き時間が少ない中なんとか練習時間を作り出していた。小道具にも工夫を凝らして、徐々に素晴らしいプレゼンを作成させ、本番は練習以上に熱のこもった力強いパフォーマンスを披露してくれた。残念ながら入賞は叶わなかったが、

何よりも「理想的教師像」を示したいという彼女たちの強い想いを形にできたことが大きな収穫であったと思う。陰で応援していた私の中では優勝であった。

ダイアログコンテストについてはレベル別に分かれているディスカッションのクラスから出場チームが選出されるため、各チームのもともとの英語力には差はある。しかし内容と演技によっては下のクラスが上のクラスを破る場合もある。ここがこのコンテストの面白いところでもある。

この原稿を書いている時期(12月初旬)は、ダイアログコンテストの練習が大学の空き教室のあちこちで行われている。皆、勝利を意識して練習に熱が入っていることだろう。今年は全体的に意欲的な学生が多く、全クラスから上限の2チームがエントリーしているとのことである。どのチームにも全力を尽くしてほしいと願っている。



教育実習報告

松尾 徹

今年度は大学教職課程8名、短大教職課程3名が教育実習に臨んだ。今年度の教育実習の特徴は2つあるように思う。1つ目は実習生の任された担当授業数が実習校によって本当に差が激しいということである。通常教育実習は3週間あるので、最初の1週間は授業見学がメインで、2週目に部分担当を何度か任せられ、2週目の後半もしくは3週目から1人で授業を任せられるというケースが多い。しかし、今年度の実習生は1週目の2日目からいきなり授業を任せられて全体で32時間というすごい授業数を行った学生もいれば、筆者が研究授業を見に行った実習生は、ごく短い部分(最初のウォームアップの活動や途中の音読指導など)を少し担当させてもらっただけで、50分まるまる授業を任せてもらったのはたった1回だけで、しかもそれが研究授業であった。この事を考慮すると堂々と落ち着いて授業を行うことができていたが、やはり時間配分が少しうまく行かなかったことや、今回の研究授業を振り返って、う

まく行かなかった事を改善して次の授業に活かす機会がなかったのが非常に残念である。

もう一つの特徴は去年度にも増して、ICTやデジタルテキストの活用が多かったことである。実習校によっては生徒一人一人Chrome bookを持っており、朝のホームルームの時間に英語の単語学習にアプリを使って行っていた。また、筆者が訪問した実習校でのクラスルームにもプロジェクターがあり、教科書を電子テキストとして使用していた。語彙の意味確認や発音指導、教科書本文の音読指導も電子教材に含まれる音声を使って行っていた。実習生も機器の操作に慣れており、しっかり活用することができていたように思う。だが、ICT教材を操作する必要があることから、教壇にいる時間が長かったように思う。他の実習生の多くも文法の説明のためにパワーポイントを使用して教材を作成し、活用したようである。だが、ICT教材を活用することで、机間指導の時間が少なくなるのでは本末転倒である。ICT教材をいつ、どのような場面で使い、どのようにして生徒の学習の進捗具合を確認するかが、これからの課題であるように思う。

2023年度 教員養成センター活動内容

- 5~7月 教育実習(第一期)
- 6月18日 オープンキャンパス教職説明会(卒業生を迎えて)
- 6月21日 教職課程オリエンテーション
- 7月16日 オープンキャンパス教職説明会(卒業生を迎えて)
- 7月21日 第12回教職勉強会(教育実習報告)
- 9~10月 教育実習(第二期)
- 10月 介護等体験
- 12月9日 第13回教職勉強会(教育実習報告、講演)



編集後記

★ 2023年5月に新型コロナがインフルエンザと同等の5類に移行したことで、本格的にコロナ前の日常が戻ってきました。教職課程の色々な行事や教育実習が通常通り行われ、このNLでご報告できることに感謝します。(大塚朝美)

★ NLの編集に携わるのは今年で3年目となりました。これからも、教員養成センターの活動の一環として、微力ながら貢献したいと願っております。(仲川浩世)

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号
Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/oj/?ttc=教員養成センターについて>
e-mail: ttc@wilmina.ac.jp